

安永天明期江戸歌壇の一側面：「角田川扇合」を手掛かりとして

盛田，帝子

<https://doi.org/10.15017/4741873>

出版情報：雅俗．4，pp.110-131，1997-01-31．雅俗の会
バージョン：
権利関係：



安永天明期江戸歌壇の一側面

——「角田川扇合」を手掛かりとして——

盛 田 帝 子

一 はじめに

承平五年（九三五）夏に成立したと推定される大納言恒佐扇合は、他撰本『貫之集』にその時の一首を残存するのみであるが、現存最古の扇合とされている。この扇合の存在は、早く黒川春村が『貫之集』を用いて紹介しており（『墨水遺稿』）、これが最初の指摘であるとされてきた。^{註1}しかし、春村の生まれる二十年も前の安永八年に、既にこの扇合の存在を知り、自らも扇合を主催した人物が存在した。三島景雄である。景雄が催したこの扇合は、安永八年八月十四日に隅田川のほとりで行われ、『角田川扇合』『廿三番扇合』等の書名で今日に伝わっている（なお、本稿では催しとしては「角田川扇合」と表記し、書名としては『角田川扇合』と表記して、混同のないようにしたい）が、その主催者景雄が記した跋文の冒頭に次のような言がある。

あふぎ合はあがれる世のことにして、さす竹の大宮のうちの御たはぶれ成かし。貫之があふぐあらしのとよめるはふりにたるためしにて、天祿の御門もいと興ぜさせ給ひ、長寛・承安の比はさかりに侍りしとか傳へ承りぬ。其後は又かゝることも聞え侍らぬは、世のくだちたる故にこそと思ひ給ふれ。（下略）

景雄の跋文によれば、安永八年当時扇合は完全に跡絶えてしまっていたことになる。同じく、執筆を務めた賀茂季鷹の跋文には、

物あはせは石上ふりにたる世の事にて、今は百師木の大宮わたりにもさることはたえて久しくや成にけん。まいて鳥がなく東のはてには、かゝることありきとだにしる人もいとまれらに侍るめり。（下略）

とあり、古くに行われていた物合も、近世中期には京都の堂上歌人の間でも絶えて久しく、まして江戸では、過去に物合という催しがあったことすら知る人は稀になっていったことになる。実際、近世期を通じて行われた扇合で、これまで筆者が確認し得ているのは三回のみである。そのうちの二回は安永期に景雄が主催して行ったもので、ここで取り上げる「角田川扇合」と、「後度扇合」である。残りの一回は文政七年四月一日、清水浜臣が門弟を集めて行っているものである。いずれも当座で扇と和歌とを合せたものである。それでは、永らく跡絶えていた扇合が、なぜ安永八年に、京都ではなく江戸で催されることになったのだろうか。また扇合を再興した三島景雄とその周辺の歌人達とは一体どのようなグループなのだろうか。

以下、安永八年に突如として行われた「角田川扇合」を手掛かりとして、扇合を復興した景雄周辺歌人グループの実体を明らかにしつつ、安永期から天明期にかけての江戸歌壇の一面面を示してみたいと思う。

「角田川扇合」に関しては、早くは金子元臣氏の「みか寺の扇合」（『歌かたり』明治書院 明治三十五年四月）、中野三敏先生の「文人と前期戯作」（『言語と文芸』五十一号 昭和四十二年三月）、丸山季夫氏の「三島自寛と角田川扇合」（『国文学史上の人々』、初出「国語と国文学」四十五卷七号 昭和四十三年十月）・「三島自寛晩年の逸事」（同上、初出『近世の学芸』昭和五十一年三月）がある。金子氏の論稿は、催された年や参加者の把握等に誤りがあるが、この扇合の存在を最もはやく紹介したものとなっており、中野先生は、「角田川扇合」で扇の判を行った山岡浚明の意識について論及されて

いる。現段階で「角田川扇合」全体を扱って最も詳細なものは、丸山氏の上記二論稿である。氏は、国立国会図書館本、宮内庁書陵部本、無窮会本によって「角田川扇合」のことを調査され、催主・判者等について「この扇合は隅田川のほとり、石原のみか寺に、三島自寛が催したもので、山岡明阿が扇の判を、荷田蒼生子が歌の判をし、賀茂季鷹が執筆と云ことで行はれた二十三番の歌合である」と紹介し、扇合が催された「場所」や「年」、「参加者」等について考証している。場所は確には定め得ていないが、時については安永八年八月十四日と定め、「角田川扇合」の集りは、「同じ古学の歌会でも縣居系のもではなく、荷田系の古学の人々の集りと見る事が出来る」としている。今回は、この丸山氏の論稿を更に発展させて、氏が「荷田系の古学の人々」と一括りにされていたグループの実態を明らかにしたい。

二 諸本および森文庫蔵『廿三番扇合』書入れ

『角田川扇合』は、様々な表題を附され、写本で流布してきた。現在、筆者が確認し得ている諸本を挙げると以下の通りである。

- ① 『扇合』（国文学研究資料館所蔵本）
- ② 『廿三番扇合』（大阪市立大学附属図書館森文庫所蔵本^{注3}）
- ③ 『墨田川扇合』（大阪市立大学附属図書館森文庫所蔵本）
- ④ 無題（八戸市立図書館所蔵本、今回は国文学研究資料館のマイクロフィルムによる）
- ⑤ 『隅田川扇合』（無窮会図書館所蔵本、清水浜臣手校本）
- ⑥ 『角田川扇合』（国立国会図書館所蔵本）
- ⑦ 『加茂季鷹翁評 廿三番扇合和歌』（中野先生所蔵本）

- ⑧ 『扇合』（無窮会図書館所蔵本）
- ⑨ 『扇合』（宮内庁書陵部所蔵本）
- ⑩ 『扇合』（賀茂季鷹旧蔵本）

この内、⑥・⑧・⑨が丸山氏の検討された写本ということになる。

これらの写本群の内、注目すべき特徴を備えたものに、①『扇合』（国文研本）・②『廿三番扇合』（大阪市大森文庫本）・③『墨田川扇合』（大阪市大森文庫本）の三本がある。これらは、参加者の身分や本名等の書入れが施されており、「角田川扇合」がどのような人物の集りであったのかという点を明らかにする上で非常に貴重な資料であると言える。中でも②『廿三番扇合』の書入れは、特に詳細なもので、安永八年時点での、景雄を中心とする歌人グループのメンバー構成を明らかにするものであるので、ここに表形式で紹介することにする。

まず、表の見方を簡単に示しておく。

一、1～46まで番号を付している人物は、「角田川扇合」の出席者であり、一番から二十三番までの各番の、左右の順に番号を附した。例えば、一番は、左が泰衡であるので1、右が見子であるので2というようにである。

一、「森文庫表記」は、出席者名を②『廿三番扇合』の原文の表記のままに記した。

一、「振仮名」も、②『廿三番扇合』本文に附されていた訓みを原文の表記通りに記した。振仮名のないものは、原文に振仮名が附されていなかったという事を意味する。

一、「人名」は、『角田川扇合』諸本もしくは他資料を参考に筆者が記した。

一、「森文庫注記」は、②『廿三番扇合』の書入れを忠実に翻字した。

一、「文献所見」は略号を以って表にした。各文献を示すと以下の通り。

「後」『後度扇合』 安永十年六月十五日 三島景雄主催。

「平」『平家物語竟宴和歌』 天明元年閏五月 三島景雄主催。

「元」『兼題当座留』 天明元年七月廿日～十一月廿日。

「二」『月次和歌留』 天明二年正月廿日～同三年十月十一日。

「虫」『十番虫合』 天明二年八月 源蔭政主催。

「三」『天明三年月次和哥留』 実は天明四年月次歌会の記録。天明四年正月二十日～五月十一日。

「春」『春秋のあらそひ』 天明四年十一月十九日。於吉田桃樹邸。

「七」『天明七年月次留』 天明七年正月廿日～十二月十五日。

「杉」『杉のしづえ』 荷田蒼生子家集。寛政七年刊

以上の文献でその名の見える人物に各々○を附している。

一、「丸山論文」は、先に挙げた丸山季夫氏の「三島自寛と角田川扇合」(『国学史上の人々』)で、丸山氏が言及されている人物には○を、言及されているが「森文庫注記」とは一致しない人物には×を、触れられていない人物の欄は空白にした。《表I》を見ればわかる通り、「森文庫注記」には、各人についての重要な情報が記されている。この「注記」は丸山氏が、「三島自寛と角田川扇合」の中で記されている各人に対する考証を裏付ける資料にもなり、また、氏が「如何なる人か不明である」「何等知る事の出来ない人」と記している人物の素性をも明らかにするものである。

丸山氏は二十一人の素性を明らかにしているが、そのうち「注記」と一致するのは十七名で、この「注記」の信憑性を側面から保証する。氏の考証と「注記」の内容とが一致しない人物は二十一人中四名(4在家、8素履、23繁子、31栄子)であるが、丸山氏は推定にとどまっており、森文庫『廿三番扇合』の注記を疑う材料とはならない。

ところで、この扇合で執筆をつとめた賀茂季鷹は、会が催される約一年前の安永七年十月末に一時帰京している。その帰京の際に、後に『角田川扇合』に出席する事になる幾人かが歌を寄せている。その贈答歌等を書き留めた季鷹自筆本『旅のゆきかひ』に「見子」「あやとも」「景員」「素履」「あや郷」の歌が記され、各人物に季鷹の手で次のような頭注が施さ

れている。

「見子」…「松平周防守康福母堂」

「あやとも」…「西門蘭斎」

「景員」…「榊原家留主居原衛士之助」

「素履」…「荒木左治」

「あや郷」…「西門」

これらの内容が「注記」と一致する事を考えてみても、「注記」は信頼にたる情報であると言える。

以上のことから、この書入れは、その詳細さと、現在の研究レベルがすでに明らかにしている人物の素性との一致から、完全とはいえなくとも、おおむね事実を記していると思われる。特定の人物には「様」を付けていることから、同時代に近い書入れであることを推測させる。したがって、この書入を充分検討し、別資料で確認していくことが今後の課題のひとつになる。なぜなら、この書入によって、景雄・季鷹を中心とする歌人グループ、蒼生子を中心とする歌人グループの構成員とその身分などが、かなり明らかになるからである。

なかでも注目すべきは、正鷹と名乗る人物が、「両国橋浪人荒井右膳」と記されているということである。この「正鷹」は季鷹のことである。先に挙げた諸本の内、①『扇合』（国文研本）・②『廿三番扇合』（大阪市大森文庫本）・③『墨田川扇合』（大阪市大森文庫本）は季鷹跋文の署名が「みなもとの正鷹」になっているが、清水浜臣手校本の⑤『隅田川扇合』（無窮会本）では、「みなもと」が見消ちされて「かもイ」に、正鷹の「万歳（まさ）」が見消ちされて「季イ」になっている。さらに、季鷹旧蔵本⑩『扇合』では、正鷹の「正」が消されて上から「季」と書き直した跡がはっきりわかる。つまり、季鷹は「扇合」の催された当時は「みなもとの正鷹」とも名乗っていたということが推定されるのである。季鷹の安永八年当時の行跡は従来明らかではないのだが、この書入れが信頼できるとすれば、彼は、「浪人」として両国橋に「荒井右膳」と名乗って住んでいたことになる。なお、季鷹が右膳と名乗っていたことは、黒川盛隆著『松の下草』にも記されてい

《表I》

森文庫表記																						振 仮 名		人 名		森 文 庫 注 記		文 獻 所 見							丸 山 論 文	
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	泰 衍	ヤスミチ	加藤泰衍	見子	加藤上総介様	後 平 元 二 虫 三 春 七 杉	○								
雅義	宣榮	直子	蔭政	忠順	拙翁	總幸	久樹	三仲	春龍	有之	信子	千蔭	野枝子	素履	明阿弥	正鷹	通照	在家	氏休	見子	泰衍	マサヨシ	ノフヨシ	小林雅義	中村宣榮	中橋桐河岸名主										

る。また36の千賀子は「荒井右膳内方」とあるが、季鷹の妻はまさしく千賀子であり、この当時既に結婚ないし同居していたことが明らかになるのである。謎とされる季鷹江戸在住時代の一端が垣間見られるわけだが、この点は季鷹伝記研究の方
向から、さらに追求してみたいと思う。

三 物合の季節

安永八年秋に催された扇合は、一過性の催しには終らなかった。「江戸ノ三島吉兵衛源景雄・羽倉蒼生女、前には安永八年秋にニ設ケリ。又扇合ノ挙アリシニ、三十五番ニ及ベリ。又前裁合モ設ケリ。是ハ万葉第八ニ載セシ七種ノ草花ヲ分ケ詠スル也ケリ」とは、安永八年起筆天明元年擱筆の蓬萊尚賢の聞書き・抜書き等から成る『亥丑録』の記事である。この記事に従えば、安永八年秋に催された扇合の後、更に景雄・蒼生子が中心となった三十五番の扇合、前裁合が行われたということになる。実際蒼生子の家集『杉のしづえ』に次のような一首が収録されている。

丑の年六月中の五日、扇合に、夏扇にして白きうすものひとへを月と思はせたるばかり残して、皆金のすなご地にて
夏ふかきねやにならせば秋かぜのすみかたづねてつきもとひけり

この詞書によれば、丑の年、つまり天明元年の六月十五日に再び扇合が行われているということになる。前回が秋の「月をみがてら」という趣向であつたのに対して、今回は夏の月をみがてらにということであろうか。上の詞書を裏付けるように、天明元年に行われた扇合の記録『後度扇合』（季鷹旧蔵本）も存在し、蒼生子は九番で景雄と対戦している。景雄の勝は扇、蒼生子の勝は歌である。

九番

左 勝

景雄

はちす葉の露にやどれる月みれば濁にしまぬ心ちこそすれ

勝 右

蒼生子

夏深き闇にならせば秋風のすみかたづねて月もとひけり

右ハ、うすものにて張て月のいでたる所を砂子もてまきたるが涼しく見え侍り。つまくななるも上臆しく覚え侍り。

左は、やつがりがいだせしえせあふぎにて、遍昭の哥の心もて水さうの玉を糸もてぬきたるは露の心なるを、ねんずめきて人わらへなるに、はちす葉をさへかきければ、極楽の心ばへにやなど申人も侍れば、げによくも申けりと獨わらはれ侍り。かゝるあやしきさまなるあふぎも外に見え侍らねば、勝べきふしもあらねど、一とせ扇合し侍りし時、あふぎもうたも負にければ、又いつの世にか勝侍らん。さきはひに此右のぬしはふるき契ありてへだてなき中なればとて、判者のとく分に於て勝に申うけ侍りぬ。

右のうた秋風のすみか尋て月もとひけりといへる心深くあはれにも侍るかな。後京極殿の手にならす夏の扇と思へども只秋風のすみかなりけりとよみ給ひし心ばへにかよひておかしく侍ればきはめたる勝なるべし。

季鷹旧蔵本は、序跋等はなく、判者名も記されていない。季鷹自身この扇合に参加しているから、判者名等記さなくとも自明のことだったのである。しかし、幸い九番の扇の判詞の二つの傍線部が、我々に扇の判者を示してくれる。左の扇を出した人物、また安永八年の扇合の際、扇と歌の双方とも負け、蒼生子と「ふるき契り」があつて親しい間柄の人物、すなわち三島景雄である。

三島景雄は安永八年の扇合の際、遊女花扇と終のつがいであつたが、扇も歌も負けている。この時の扇の判者は山岡明

阿、歌の判者は荷田蒼生子であつたが、以下のような理由で景雄は双方とも花扇に敗れている。

《扇の判》

けふのあふぎ合の数くも、この終のつがひ「二十三番」にことはてぬるきはなれば、右左の念人たちも、おのく引かたにころをよせて、いづらやくとめをそばめ、ひぢをはり給ふかたもおほかなるなかに、わきてあながちに、この左「花扇」にかたぬきてんと思ひなりぬ。これまたくわたくし「明阿」のまがくしき心に出たるに似たりといへども、かたへにはあなうら山しのよきまけかなと、そく忍び聲の老のひが耳にも聞え侍れば、をみなへし「花扇」になびきけん翁草「明阿」のあざけりをも忘れて、かたく左「花扇」をもて勝と定め侍りぬるものならし。

《歌の判》

左の哥「花扇の歌」源氏の花の宴のえんなる心詞に通ひて、そくろにその人ざまさへしのばしくこそ。右哥はまして今日のあるじ「三島景雄」の扇にもえならぬ春秋の色をみせ、哥にもいひしらすふかき心をのばへ給ふは、いふにあまり、思ふにたへず。艶にみやびたるとは、かくるをこそ申べからめ。此たびの秀逸なるべし。されど忍べよと「花扇の歌の初句」なまめかしくいひ出たるが、にくからねば、けふの折にあひたる名にしあふぎに、しばらく勝をゆづり給ふも一興ならんかし。

（「」内、盛田註）

今をときめく遊女花扇を眼前にして、明阿も蒼生子も催主の景雄ではなく花扇に花を持たせてこの扇合の幕を閉じているのである。

この時扇の判をしていた山岡明阿が「後度扇合」に見えないのは、明阿が安永九年十月十五日に没しているからである。その扇の判を受け継いだのは景雄であつた。さらに、本文を読んでゆくと、歌の判も景雄が行っているということがわかる。

つまり、この扇合で景雄は扇と歌の双方の判者を務めていたのである。

ここで簡単に『後度扇合』の参加者を若い番数から左右の順で挙げる。このうち扇合と重なるメンバーには傍線を付す。

元著・いくめ子、見子・ませ子、蔭政・鎮子、元貞・長年、正賢・弁子、喜長・久樹、とゑ子・伊勢子、忠順・廣足、景雄・蒼生子、総幸・昌伴、知宣・諸鳥、武人・知邑、義武・長枝、盈之・もと子、守静（無記名）、内美・真恒、義厚・厚躬、栄雄・藤子、房子・賢壽、さえ子・光英、有之・鶴尼、知春尼・稲城、榎子・五百子、妙意尼・宗秀、貴豊・ゑつ子、妙性・芳充、貞賢・鶴群、秀房・陳衡、信行・魚足、芳章・義敬、景員・貞照、正好・繁樹、邦實・則邦、きん子・清瀬、季鷹・千蔭（以上三十五番七十名）

表でも示した通り十九人が『角田川扇合』の出席者と重なる。

景雄等が行ったもうひとつの物合である「前裁合」に関しては、現段階では『亥丑録』の記事で確認し得るだけで、それ以上の情報は知り得ない。しかし、景雄、季鷹、千蔭等、景雄グループが中心となつて行われた物合の存在が他にも確認できる。源蔭政主催の『十番虫合』である。

『十番虫合』の存在は、はやく安藤菊二氏が「三島自寛の『十番蟲合』のはしがき」（『江戸の和学者』日本書誌学大系39所収）の中で紹介している。昭和十七年当時名古屋図書館に所蔵されていた随筆『旅の行かひ』の中から景雄の序文と参加者を写し取られ、紹介されているのである。しかし、『旅の行かひ』は戦中に焼けてしまい今は存在しない。

『十番虫合』の諸本について現在確認し得ているのは、国文学研究資料館本（『平家物語寛宴和歌』と合冊）、『梅處漫筆』（刈谷市立図書館所蔵本、国文学研究資料館マイクロフィルムによる）の中に収められているもの、大東急記念文庫所蔵『虫十番歌合繪卷』の三本である。景雄の跋文によれば、天明二年八月十日あまり、隅田川の辺の木母寺で、源蔭政の主催で、虫合を行っていることが知られる。左方は鈴虫を出して歌を詠み、右方は松虫を出して歌を詠むという趣向で、虫の判

を加藤千蔭、歌の判を賀茂季鷹が行っている。出席者は若い番の順序にしたがって記すと以下の通りである。

利徳・季鷹、桃樹・元貞、千蔭・景雄、忠順・元著、総幸・芳元、房子・八十子、芳草・正長、真恒・有之、知宣・躬弦、豊秋・蔭政（以上二十名。『角田川扇合』の出席者には傍線を付した）

顔ぶれは、やはり景雄を中心として物合を行ってきたメンバーと重なっている。

ここで、景雄を中心としたグループが行ってきた物合を整理すると以下になる。

○安永八年八月十四日

『角田川扇合』

○安永十年六月十五日

『後度扇合』

○

『前栽歌合』

○天明二年八月十日あまり『十番虫合』

また天明四年十一月十九日には、上記のメンバーと重なるメンバーで春秋歌合が行われている。季鷹旧蔵『春秋のあらそひ』によって、参加者を春・秋という順で記すと、景雄・桃樹、躬弦・千蔭、安久・季鷹、総幸・有之、延年・豊秋、諸鳥・秀房という顔ぶれ（『角田川扇合』の出席者には傍線を付した）である。この歌合は、天明四年十一月十九日、葛飾の吉田桃樹邸で行われており、出席者は、天明三年の秋頃から賀茂季鷹邸で行われてきた源氏物語講読に出席していた人々だと思われる。この会はその講読を終えての竟宴であった。この歌合は、物合的な趣向をこらして各人が歌を提出したものらしい。たとえば一番の春の景雄の歌「かげろふのもゆる春野の初わらび君にみせんと手折りつる哉」には「宇治の僧都の心ばへなるべし。わらびのかたしたるくだものを青やかなる籠に入てさわらびかさねのうすやうに歌を書てそへたり」という季鷹の

説明が付いている。

このグループは以上のように安永の終りから天明の初めにかけて何度も物合を行っている。一次資料が残っている『角田川扇合』、『後度扇合』、『十番虫合』、『春秋のあらそひ』からすると、景雄グループの特に中心となっていた人物は、賀茂季鷹、加藤千蔭、武田有之、大山総幸、三島景雄という五人である。

ところで、天明二年に催された『十番虫合』については、景雄写・田中納言画とされている全長約十三・六メートルにも及ぶ巻子本が大東急記念文庫に所蔵されている。参加者各人が趣向を凝らして作成した州浜上の世界が彩色画で再現されており、この催しが如何に華やかなものであったかが偲ばれる。虫合といっても単に鈴虫と松虫を合せるのではなく、各人が州浜の上にそれぞれの虫にちなんだひとつの世界を作り上げ、その中に左方は鈴虫を、右方は松虫を置くのである。そして、左方はその世界にちなんだ鈴虫の歌を右方は松虫の歌を詠む。例えば、一番の利徳（左）と季鷹（右）の歌および千蔭の虫の判詞を挙げてみよう。

一番

左

利徳

雨ならでふりつゝ虫のなくなへにきても見るべく萩が花笠

右

季鷹

玉琴のしらべにいつの秋よりか松むしの音もかよひ初けん

左はみさむらひミ笠とまうせといへる心ばへして朽葉色の狩衣の袖を臺にて、えぼしを虫籠にして、しろがねの笠を萩がもとにおけり。虫ハ宮城野よりえらみて参らせたるなり。右は、亭子院のみかど西河にみゆきまし／＼ける御時奉れる哥の席、忠峯が出たる、或時には山の端に月松虫うかゞひて、琴の音にあやまたせとのべるによりて、すはまにちいさき琴をすゑて、かたはらに松かさねの色あひに糸もてまける籠に虫をこめたり。かた／＼いとこよなきみやびなり。

されど名におへる宮城野の虫にこゝろひかるれば、左かちとし侍りぬ。

典雅で繊細な趣向が判詞から十分読み取れる。この州浜上の小宇宙を景雄は、後世に残そうとしたのである。

かゝることの此まゝにやまんもほひなきわざなれとて、其くさくさをかたに書てふた巻になしぬ。こはそのおりのこと
草をのち／＼に忍ぶの草のしのばんことをおもひてなり。天明二年八月の末つかたにします。源景雄（『十番虫合』跋
文）

このように、物合のモノを画で残すという方法をとったものに、少し時代は下るが清水浜臣の『泊泊舎扇合』がある。これは文政七年四月一日もしくは二日、清水浜臣が歌を詠む際の材料にという趣旨で、門弟を集め、左方は花、右方は月という題で対戦した五十一番の扇合である。西尾市立図書館岩瀬文庫に、それぞれ『泊泊舎扇合』、『扇合』という外題で二部所蔵されている。どちらも三冊からなり、大東急記念文庫所蔵『虫十番歌合繪巻』のように、各人の出した州浜の世界に扇が彩り鮮やかに描かれている。

このように浜臣が物合を行ったり、物合のモノの趣向を絵として残していることについては、あるいはそこに景雄の影響があることが考えられるかもしれない。

ともかく、安永終りから天明期にかけて、景雄を中心とするグループが度々物合を行っている事は、歌壇史上注目すべき事である。従来県居派や江戸派の影に隠れてあまり注目されていなかった景雄グループの活動を今後さらにつぶさにたどってみる必要がある。

四 季鷹旧蔵天明期月次歌会資料をめぐって

さて、上記景雄グループと密接な関係があると思われる人々を中心とした、天明期の月次歌会の記録がある。季鷹旧蔵の数点の月次歌会資料であるが、これらの資料は、一体何を物語っているのでしょうか。まず資料を紹介する。

- 1 『兼題當座和歌』（天明元年七月二十一日～同年十一月二十日）
- 2 『月次和哥留』（天明二年正月二十日～同三年十月十一日）
- 3 『天明三年月次和哥留』（天明四年正月二十日～同年五月十一日）
- 4 『天明七年月次留』（天明七年正月二十日～同年十二月十五日）

これらの資料によって天明元年から天明四年と天明七年の、江戸歌壇に一隅を占めたと思われるグループの月次歌会の様相を窺うことができる。メンバーは異なり人数で当座兼題を合せ百四十九名にも及ぶが、季鷹旧蔵資料とあつて季鷹ゆかりの人々が多い。そしてこれらのメンバーが物合グループと重なっていることは、見過ごせない問題である。今便宜的に、これらの月次歌会に参加したメンバーの出席もしくは出詠回数の上位者を記してみる。これにより中心メンバーとその推移がおおよそ把握できるからである。

○天明元年月次歌会（七月二十一日～十一月二十日）

※（一）内は出席もしくは出詠回数

《当座》

《兼題》

《総合》

○天明二年月次歌会（正月二十日～十二月十五日）

《当座》

桃樹 (二一)
季鷹 (二〇)
躬弦 (二〇)
景雄 (一五)

《兼題》

桃樹 (二二)
躬弦 (二〇)
総幸 (一九)
豊秋 (一九)

《総合》

桃樹 (四三)
躬弦 (四〇)
季鷹 (三七)
総幸 (三四)

盈之 (八)
総幸 (八)
季鷹 (八)
千蔭 (七)
桃樹 (七)
景雄 (七)
秀房 (七)
知宣 (五)
忠順 (四)
有之 (四)

千蔭 (九)
桃樹 (九)
盈之 (九)
総幸 (九)
季鷹 (九)
知宣 (六)
忠順 (五)
景雄 (五)
栄雄 (五)
景員 (五)
秀房 (五)
房子 (五)
きし子 (五)

盈之 (二七)
総幸 (二七)
季鷹 (二七)
千蔭 (二六)
桃樹 (二六)
景雄 (二二)
秀房 (二二)
知宣 (二一)
知春尼 (二〇)
忠順 (九)

○天明三年月次歌会（正月二十日～十月十一日）

《当座》

千蔭	忠順	信説	秀房	豊秋	景雄	総幸	季鷹	躬弦	桃樹
(七)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一〇)	(一二)	(一二)	(一四)	(一四)

《兼題》

栄雄	景雄	秀房	総幸	豊秋	信説	季鷹	桃樹	躬弦	るせ子
(八)	(一一)	(一二)	(一二)	(一三)	(一三)	(一三)	(一四)	(一五)	(一五)

《総合》

千蔭	るせ子	信説	秀房	景雄	豊秋	総幸	季鷹	桃樹	躬弦
(一二)	(一五)	(二一)	(二一)	(二一)	(二三)	(二四)	(二六)	(二八)	(二九)

知宣	有之	秀房	豊秋	千蔭	総幸
(六)	(一〇)	(一二)	(一四)	(一四)	(一五)

栄雄	景雄	秀房	きし子	るせ子	季鷹
(一二)	(一二)	(一四)	(一六)	(一七)	(一七)

きし子	知宣	るせ子	千蔭	秀房	景雄	豊秋
(一六)	(一六)	(一七)	(二四)	(二六)	(二七)	(三三)

有之 (七) きし子 (八)

○天明四年月次歌会(正月)

《当座》

季鷹 (八)

躬弦 (七)

桃樹 (六)

方之 (六)

昌慶 (六)

千蔭 (五)

総幸 (五)

秀房 (五)

豊秋 (五)

景雄 (三)

政廣 (三)

通顕 (三)

延年 (三)

《兼題》

やそ子 (九)

正昌 (九)

躬弦 (九)

季鷹 (八)

豊秋 (八)

桃樹 (七)

秀房 (七)

信説 (七)

洪篤 (七)

総幸 (六)

《総合》

季鷹 (二六)

躬弦 (二六)

桃樹 (二三)

豊秋 (二三)

秀房 (二二)

総幸 (二一)

方之 (二一)

昌慶 (二一)

千蔭 (二〇)

正昌 (二〇)

○天明七年月次歌会

《当座》

《兼題》

《総合》

季鷹	(二三)	信説	(二三)	季鷹	(四五)
信説	(二二)	豊秋	(二三)	信説	(四五)
豊秋	(二二)	躬弦	(二三)	豊秋	(四五)
躬弦	(二二)	季鷹	(二二)	躬弦	(四五)
縫子	(一六)	縫子	(二五)	縫子	(三一)
千蔭	(二四)	文子	(二五)	真菅	(二九)
真菅	(二四)	真菅	(二五)	千蔭	(二六)
員保	(二三)	りせ子	(二五)	員保	(二六)
直節	(二三)	十重子	(二五)	恒之	(二五)
恒之	(二二)	恒之	(二三)	秋年	(一八)
		勝見	(二三)		
		幸子	(二三)		

一連の歌会は、表紙の注記によれば、天明四年正月までは「義憤亭」で行われた模様である。この「義憤亭」は季鷹の号であろう。『兼題當座和歌』（天明元年七月二十一日～同年十一月二十日）によれば、冒頭に「天明元年七月廿日新室念初秋日詠新秋月和歌」とあり、あるいは、季鷹の「義憤亭」なる新室の完成と共に月次歌会を始めたのかと思われる。このグループは毎月十一日・廿日にそれぞれ兼題と当座歌会を行っている。またメンバーは、季鷹ゆかりの人物が多く、物合グループとの重なりが目立っている。たとえば、季鷹、千蔭、景雄、総幸、有之、忠順らは、歌会でも中心メンバーと言えるし、見子、氏休、素履、三仲、蔭政、元著、知春尼、嘉郷、景員、久樹、知宣、みの子も歌会に参加ないし出詠の跡がある。その一方で、蒼生子は出詠しておらず、その周辺人物も天明六年に蒼生子が没するまでは出詠していない。

物合グループには名前のなかった人物で、歌会中心メンバーなのは桃樹・盈之・躬弦・知宣・信説・豊秋等であろうか。桃樹は吉田桃樹、幕臣で季鷹門人。躬弦は安田躬弦、福井藩医で季鷹門人。知宣は長尊寺の人で季鷹門人。信説は水江金右衛門、小浜侯家臣で季鷹門人。盈之・豊秋は未詳であるが、やはり季鷹門人であろうか。

これらの月次歌会においては景雄やその門人の有之は徐々に参加回数を減らしてゆき、代わって季鷹一門が会の中心を担ってくるようである。この月次歌会の存在も、従来の江戸歌壇研究からは抜け落ちていたものである。このような資料はまだ発掘すれば出てくるに違いないが、そのひとつひとつの積み重ねによって、歌壇史を構築していくしかないと思われる。今回の報告によって、三島景雄・賀茂季鷹を中心とするグループの活動の一隅を照らすことができたとすれば幸いである。

注

1 萩谷朴『平安朝歌合大成』一。

2 賀茂季鷹旧蔵本。

3 外題・内題なし。書名は大阪市立大学図書館の認定書名による。

4 季鷹旧蔵本。

5 この記事については既に丸山季夫氏が「三島自寛晩年の逸事」の中で指摘している。『亥丑録』は、伊勢内宮の権禰宜であった蓬萊尚賢の雑記で、現在は『荒木田瓢形翁雑記全』という題簽の貼付された表紙が付されているが、元表紙には「亥丑録 起^マ丁亥終辛丑 安永八年十月起稿 同九年 同十年此年四月改曰天明元年」と直書されている。内容は安永八年から天明元年にかけて尚賢の聞書、拔書等から成る。三重県立図書館所蔵。

6 西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵『泊泊舍扇合』（三卷三冊）、同文庫所蔵『扇合』（三卷三冊）による。但し、『泊泊舍扇合』の作者目録には「文政七年四月二日」、『扇合』の跋文には「文政てふ七とせの夏卯月ついたちの日」と記さ

れており、一日に催されたか、二日に催されたかは未詳。

7 中野三敏先生の御教示によれば、「角田川扇合」も、扇を彩色で描いた写本があるということである。

8 『江戸本屋出版記録』（ゆまに書房）の安永四年三月二十七日の項に「袖珍假名遣 義慣亭作 須原屋伊八」、同文化四年三月二十五日の項に「袖珍文化元年九月かなつかひ 雲錦亭著 全一枚 須原屋伊八」とある。雲錦亭はいうまでもなく季鷹の号である。また、所見の『伊勢物語傍註』（安永五年刊）付載の「青黎閣発兌目録」には、「袖珍假名遣義慣亭作 須原屋伊八」季鷹大納言両面摺」とある。これらから「義慣亭」は季鷹の号として間違いないだろう。

〔補記〕 本論で引用した文章には稿者が適宜句読点、濁点を施した。

〔付記〕 季鷹旧蔵本の閲覧に際しては、季鷹御子孫にあたる山本家御当主の特別のご配慮を賜りました。衷心より深謝申し上げます。その他本論中で言及した文献の調査及び複写に際しては、関係諸機関の方々に種々のご高配を賜りました。感謝申し上げます。